

英語由来の外来語における音韻の対応と音節構造：日韓語比較

Segmental and Syllabic Structures of the Loanwords from English: a Japanese/Korean Comparison

Choi Hynchoel・佐藤 滋

Choi Hynchoel and Shigeru Sato

東北大学大学院国際文化研究科

Tohoku University, Sendai, 980-8576 Japan

{hcchoi, satos}@insc.tohoku.ac.jp

1. はじめに

外来語の音形的な受容においては、受け入れ言語の音韻的な特質が外来語により素直に現れやすいと言われ、非音韻的な要素の混入が少ないと見られるので、外来語データによる音韻研究ではその言語の音韻構造をより直接的に観察することになる。これまでの外来語の研究では、社会言語学的な現象も含めて日本語について記述的に研究したもの^[1]、自然音韻論の観点から移入の際の音韻変化を探ったもの^[2] などがある。筆者らは、日本語と韓国語の外来語を大量に収集し、アクセント核の時間的変化も含めて音韻の対照分析をしている^[3] が、その中から英語を起源とし、両言語に共通して移入されている語を対象に音節数の増加および音韻の対応の定量的な傾向を探り、外来語生成の仕組みを考察したので報告する。

2. 分析資料

分析用の基礎資料は、日本語では、NHK編『日本語発音アクセント辞典』(日本放送出版協会, 1985) を用い、その中に収録されている英語を原語とする全外来語それぞれ 3841 語である。韓国語の場合は韓国校閲記者会編『外来語辞典』(韓国校閲記者会, 1987) に収録されている英語を原語とする全外来語(地名、人名を除く)を 2239 語である。この中から日韓両言語に共通し

て存在する語395語を選んで、本報告での分析を行った。

3. 音節数の増加

音節核音を中心として前後に子音結合が生じうる英語の音節の基本構造と比較して、日本語と韓国語は、語がCVC列から成っているために英語音形の移入には子音結合を分断して随所に母音を挿入する必要がある。このため、日韓外来語の音節数は英語の音節数に比べて増加することが予想される。表1と表2は、英語の単語がそれぞれ日本語と韓国語に移入された場合に何音節になるかを全対象語について見たものであり、日韓語とも外来語の音節数は英語の音節数より減少することがないことを示している。また、日韓語の違いについては、表1と表2の対角線上の数字である

表1. 音節数別の単語分布(英・日)

e\j	1	2	3	4	5	6	7	8	Total
1	2	41	20	7	0	0	0	0	70
2	0	32	95	38	15	3	1	0	184
3	0	0	34	37	25	3	0	0	99
4	0	0	0	19	9	7	1	0	36
5	0	0	0	0	2	2	0	0	4
6	0	0	0	0	0	0	2	0	2
Total	2	73	149	101	51	15	4	0	395

e: 英語の音節数, j: 日本語の音節数

表2. 音節数別の単語分布 (英・韓)

e\k	1	2	3	4	5	6	7	8	Total
1	7	38	18	4	3	0	0	0	70
2	0	68	71	30	11	4	0	0	184
3	0	0	46	32	20	1	0	0	99
4	0	0	0	18	12	4	2	0	36
5	0	0	0	0	0	2	2	0	4
6	0	0	0	0	0	0	0	2	2
Total	7	106	135	84	46	11	4	2	395

e: 英語の音節数, k: 韓国語の音節数

が、これらは原語とおなじ音韻数にとどまっている数字を示している。日本語と韓国語ではそれぞれ89語(22.5%)と139語(35.2%)で、この差は有意であり($\chi^2=15.413$, $df=1$, $p < 0.0001$)、CVC構造で語末子音の種類の多い韓国語とモーラ音素/N/のみが音節数を増やさず英語の音節構造を受けとめられる日本語との違いが現れていると思われる。

子音結合回避の母音の挿入の他に、日本語では音節末子音が撥音で対応できない場合はその後続音節を添

加すること、韓国語では二重母音を2つの音節に分離すること、などが日韓語での音節数増加に寄与している。そこで英語の音節構造の特徴のうち(1)子音結合、(2)音節末子音、(3)二重母音、の3つの要因を選んで、日韓語ではこれらの要因で音節増加にどのような影響の違いがあるかを調べた。

まず、子音結合については、対象語395語のうち原語に子音結合を含む語334語で、音節数が増えるものが、日本語と韓国語でそれぞれ292語(87.4%)と215語(64.4%)で、韓国語と比べて日本語の方が子音結合を原因とした音節数増加の語が有意に多い($\chi^2=48.520$, $df=1$, $p < 0.0001$)。音節末子音の場合も、対象語395語のうち原語に音節末子音を含む語315語で、日本語と韓国語でそれぞれ243語(77.1%)と146語(46.3%)で、予想されたように韓国語より日本語において音節数増加が音節末子音の存在に有意に依存していることがわかった($\chi^2=63.229$, $df=1$, $p < 0.0001$)。一方、二重母音の場合には、対象語395語のうち原語に二重母音を含む語132語のうち、日本語と韓国語でそれぞれ37語(28.0%)と105語(79.5%)で、前二者とは逆に日本語より韓国語の方が二重母音の存在による音節数増加の割合が有意に高いことがわかった($\chi^2=70.465$, $df=1$, $p < 0.0001$)。

表3. 母音の対応 (英・日)

E\J	a	o	e	i	a:
æ	112				
ʌ	37	1			
ə	92	40	12	4	48
ɑ:					16
a:	7				23

E: 英語の母音, J: 日本語の母音

4. 分節音の対応

英語の母音がどのような日韓語の母音に対応して受け入れられるかを、表3と表4に英語の/a/系の単母音(長短母音)の日韓語の母音(二重母音を除く)への対応に限って例示した。表中の数字は単語数である。これによれば、特徴的な日韓語の違いは、日本語では/a/または/a:/ですべて対応するが、韓国語では/o,e/系の母音の数が日本語より豊富なことから英語の/a/系各母音に対応して分担を図っている。一方、母音全体

表4. 母音の対応 (英・韓)

E\K	a	o	o	ε	e	i	u	i
æ	35			82				
ʌ		37	1					
ə	41	105	20		7	5	1	1
ɑ:		18						
a:	36					1		

E: 英語の母音, K: 韓国語の母音

表5. 子音の対応 (英・韓)

	K									
E		p	ph	pp	t	th	tt	k	kh	kk
	P	15	70							
	b	40								
	t				27	128				
	d				82					
	k							24	125	
	g							40		

E: 英語の子音, K: 韓国語の子音

では、(1) 韓国語では母音の長短が弁別的ではないため、英語の /a:, o:, ou, u:, i:/ はすべて対応する単母音に置き換えられる。(2) 韓国語には二重母音がないため、それらは2音節に置き換えられ(例えば、/ei/ → /e'i/)、音節数を増やす要因になっている。(3) この点では、日本語には二重母音と長母音があり、柔軟な対応が可能である。

一方、子音では閉鎖音の対応が興味深い。英語と日本語では有声性での弁別があるが、韓国語では有気性と閉鎖持続時間での弁別を行うために、表5のような対応になる。数字は単語数である。

5. 外来語生成の仕組み

英語の音素表記から日本語の外来語の音素表記を導

出する手順を考察する。以下は、音節の基本構造を作るためのもので、分節音を含めた表記を生成するためには前節で述べたような分節音の対応表を用いる。

【英語音節の分解】表6に英語単語を疑似音節に分解し、母音の挿入、音節末子音の処理、二重母音の分割などを経て日本語化、韓国語化した仮想外来語の対応表を示す。なお、表6の日本語表記は音素表記、韓国語はYale方式によるローマ字表記である。日韓語の音節の基本形を C_1VC_2 とし、英語のIPA表記を右端から見ていき、母音部分を中心に C_1VC_2 部分を取り出し、子音部分は独立させる(表6、第3列)。

【母音の挿入】子音のみの疑似音節に母音を挿入する。日本語では、/t/の後に/o/ (表6、No. 1, 2, 3)、その他の場合は/u/を後続させる(表6、No. 6)。韓国語では、/j/の後に/i/、その他の場合は/i/を後続させる。

【音節末子音への対応】日本語の場合、 C_2 が/n/の場合、そのままの音節構造を保持し(表6、No. 3, 8, 10)、/ŋ/の場合は C_1VNC_2V (表6、No. 4)、閉鎖音・破擦音の場合は、 C_1VQC_2V (表6、No. 2, 7, 8)、 C_2 がその他の場合は、 C_1VC_2V 、となる(表6、No. 3, 8, 9, 10)。一方、韓国語の場合、 C_2 が/p, t, k, m, n, ŋ, l/の場合は、英語そのままの構造を維持する(表6、No. 2, 4, 9)。その他の場合は、 C_1VC_2V 、となる。

【二重母音の処理】日本語では二重母音はそのまま二重母音あるいは長母音に移されるが、韓国語は英語の二重母音を分割し、音節数を増やす(表6、No. 1, 5)。

表6. 英語・日本語・韓国語の音節対応表

No.	英語綴り	IPA表記	疑似音節分解	日本語化	韓国語化
1	striped	[straɪpt]	s. t. raɪp. t	su. to. raJ. pu. to	su. thu. la. ip. thu
2	packed	[pakt]	pak. t	paQ. to	phayk. thu
3	print	[prɪnt]	p. rɪn. t	pu. ri.N. to	phu. lin. thu
4	string	[strɪŋ]	s. t. rɪŋ	su. to. riN. gu	su. thu. ling
5	strike	[straɪk]	s. t. raɪk	su. to. raJ. ku	su. thu. la. ik
6	program	[prɒɡrəm]	p. rɒɡ. rəm	pu. ro. gu. ra. mu	phu. lo. ku. laym
7	carpet	[kɑ:pət]	ka:. pət	kaH. peQ. to	kha. phet
8	strip cartoon	[stri:pka:tʊ:n]	s. t. rɪp. ka:. tʊ:n	su. to. rɪp. kaH. tuHN	su. thu. lip. kha. thwun
9	september	[septembə]	sep. tem. bə	se. pu. teN. baH	seyp. theym. pe
10	accident	[aksɪdənt]	ak. si. den. t	a. ku. si. deN. to	ayk. si. ten. thu

6. おわりに

英語に由来する日本語と韓国語の外来語を対象に、音節数の増加の要因、分節音の対応の定量的な傾向を探り、外来語生成の仕組みを考察した。音節数増加の要因としては、英語の音節構造の特徴のうち (1) 子音結合、(2) 音節末子音、(3) 二重母音、の3つの要因が重要であることを論じ、次のようなことが分かった。(1) 日韓語に共通のCVC音節基本構造を設定し、音節末子音の分節音の種類豊富な韓国語に比べて、日本語は音節末子音に撥音でしか対応できないため、音節末子音の処理で音節数を増加させている。(2) 一方、二重母音のない韓国語は、英語単語を受け入れる際に二重母音を二分割するために音節数を増加させている。

謝辞

本研究は、一部に文部省科研費(No. 09610530およびNo.09558022)の援助を受けている。

参考文献

- [1] 榎垣実: 日本外来語の研究, 研究社, 1963
- [2] Lovins, J. B.: *Loanwords and the Phonological Structure of Japanese*, Indiana University Linguistics Club, 1975
- [3] Choi Hynchoel: 日韓語の外来語データベースの作成とその音韻分析, 東北大学大学院国際文化研究科平成9年度修士論文, 1998